

農林水産大臣賞受賞

5つの“らぼ”とSNSを活用した住民主体のむらづくり

受賞者 ^{みらい}ほんべつ☆うきうき未来らぼ
(^{なかがわぐんほんべつちょう}北海道中川郡本別町)

■ 地域の沿革と概要

本別町は北海道・十勝の東北部に位置し、町の半分以上が山林で覆われている自然豊かな地域である。美里別^{びりべつ}川や本別川、利別^{としべつ}川が流れ、河岸段丘の地形が変化に富んでおり、野鳥や水鳥が訪れる景勝地でもある。このような豊かな自然環境の中で、約6,200人が暮らしている。

気候は北半球特有の亜寒帯気候に属し、春と秋は短く、夏は比較的高温で、冬は厳しい寒さが続くが、降雪量は道内では比較的小さい。年間を通して晴天の日が多く、降水量・降雪量が少ない十勝型の気候を呈している。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

本別町では、古くは林業が栄えていたが、近年は農業が主力産業となっている。町内では、本道の畑作3品である小麦、豆、甜菜（ビート）の輪作が行われており、酪農も盛んである。本別町は「日本一の豆の町」として知られ、カントリーサインにも採用されている。本別町発祥の「中生光黒大豆」を統一ブランド「キレイマメ」（登録商標）としてパッケージを統一し、「日本一の豆をつくる本別町の名を高めたい」「良質で美味しい『十勝本別の豆』を消費者に届けたい」という思いを込めた商品を開発・販売している。

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧市町村単位の集団等
組織の性格	地縁的な集団等
人口等	総人口 6,618人 総世帯数 3,108戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 245経営体 個人経営体数 214経営体 団体経営体数 31経営体 (内、法人経営体数) 31経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 39,191ha 耕地面積 9,781ha 田 3ha 畑 9,778ha 耕地率 25.0% 一経営体当たり耕地面積 39.9ha

また、きれいに整備された「本別公園」や道の駅「ステラ★ほんべつ」を観光の核として、地場産品の加工や地域包括ケアシステムの構築にも力を入れている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

本別町では、他地域よりも先行して少子高齢化が進む中、これまでも取り組んでいるスポーツと福祉によるまちづくりに加え、観光の振興や特産物の町外へのPR活動、周辺都市との交流、農村地域の活性化など、それらを課題としながらも地域活動の場が少なく、意見交換ができないなどの状況にあった。

現状の課題に危機感を感じた有志のメンバーにより、令和元年度より、地域活性化に向けた地域活動の発展と体制づくりの機運醸成を図るため、「まちづくり勉強会 in HONBETSU」と題し、地域活性に向けた勉強会を開催し、豊富な資源がありながら生かし切れていない観光の振興や特産物のさらなるブランド化、PR・情報発信力の強化、都市との交流、農商工業の振興、中心市街地・農村地域の活性化などの課題を解決すべく、令和2年度より、住民主体のまちづくりを実践する活動団体「ほんべつ☆うきうき未来らぼ」を発足。当該団体は、今まで各種団体に属さず地域活動に参加できなかった主婦や若年層の方々の意見を聞けるような体制を作り、老若男女問わず皆で地域課題を抽出し解決に向けた具体的な行動を起こすことを目標とし、活動している。

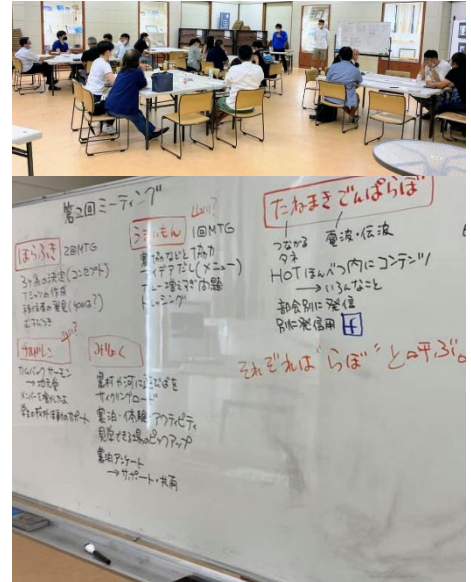


写真1 メンバーによる意見の醸成

(2) むらづくりの推進体制

当該団体は、メンバー間のワークショップで抽出した地域の諸問題を5つにグルーピングし、それぞれ「5つの“らぼ”」で対応することとした。

「うきうきチルドレンらぼ」は食育・子供支援をテーマに、「おもしろ人間発掘ほら吹きらぼ」は人材発掘をテーマに、「たねまきでんぱらぼ」は情報発信力強化をテーマに、「魅力発見らぼ」は観光資源見直しをテーマに、「うまいもんらぼ」は農産物の活用をテーマに活動している。

これらのらぼは、農業・飲食業・建設業・宿泊業・介護職・サイクリスト・教員・役場職員など、20～60代の幅広いスキルを持つ男女50名以上で構成される。

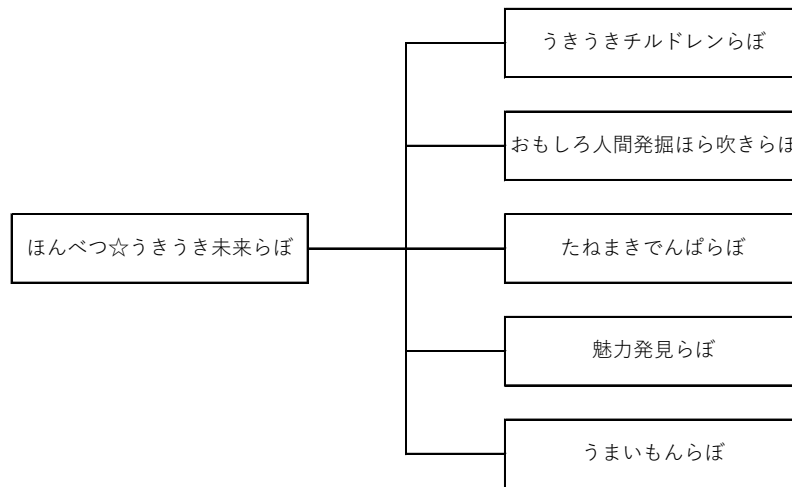
当該団体への加入脱退は随時自由に行えるとしており、Facebookのメンバー登録・解除で手続きは完了する。また、各らぼ内における連絡事項の伝達や意見交換等にはLINEグループを使用しており、メンバーの自由な意見や奇抜な発想等の表明を促している。現代らしくSNSを有効利用することにより、幅広いメンバー間に語ることで行



写真2 「ほんべつ☆うきうき未来らぼ」メンバー

動に移せることが増え、更にメンバー間の士気が上がるとの好循環が実現している。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

当該団体は、地域住民の主体的な参加と協力を通じて、多くの具体的な取り組みを展開している。これらの取り組みは、地域の活性化と住民の生活向上に大きく貢献している。

地域住民が主体的に参加し、地域の課題を解決するための具体的な行動を促す体制が必要とされている中、当該団体は住民が主体となり、地域全体での協力体制を強化することを具現化している。

一方で、地域が直面している課題の一つは少子高齢化と人口減少だが、これに対処するために必要な若者の定住促進やUターンの促進に当該団体は当初より注視しており、その地場・環境づくりに積極的に取り組んでいる。

昨今町では、甜菜（ビート）を受け入れてきた製糖工場が撤退し、乳製品工場も閉鎖が近く予定されているとのこと。いずれも施設の老朽化が主な要因となっているようである。しかしながら当該団体では、老朽化した施設は消え去る可能性があるが、仲間として迎えて絆を築き上げた人材は、いつまでも残るとの考えから、移住者や新規就農者に対しても仲間へと静かに誘っている。

当該団体は、予算や規約などを持たない、完全に有志による任意団体である。これは、制約がなく自由な加入脱退を甘受しようとするリーダーの思いを実現しているものである。これにより、メンバーは意見の表明や行動の自由を可能とするばかりでなく、メンバー外の方々への働きかけも支障なきものとしており、SNS ツールの利用も大変有効である。

2. 農業生産面における特徴

(1) 地域の中学校や住民と共に進める地元農産物を使った食育

当該団体の働きかけから始まった町立^{ゆうた}勇足中学校との連携により、令和3年度より本別の豆を使い、アレンジがし易い井ぶりメニューを生徒独自が考案し、町内のレストランシェフなどの審査員の前でプレゼンテーション等による審査を受けた後にグランプリを決定する「D-1 グランプリ」を開催してきた。昨年度はピザメニューでのコンペを行い、グ

ランプリの決定に加え、選ばれたメニューを町内と札幌 Mame Kitchen Maruyama の5店舗において期間限定で提供し、生徒たちの食育を応援した。

地元農産物を使った食育を続けることで、子供たちは料理や栄養バランスなどを考えた独自のメニューを作ることによる料理の基本技術の習得とともに、食生活の重要性だけでなく、本別町産の農産物の価値を理解し地域の誇りを伝える。周辺住民や関係者からは「生徒たちのプレゼン力が高まっている」「元気に挨拶されるようになり嬉しい」などの声が寄せられており、地域に副次的な効果ももたらしている。

また、当該団体は地域住民を対象とした料理教室を開いており、親子連れなど沢山の参加者を集めている。当初は地域に根付いていない豆料理は不評だったが、本別の豆を生豆の状態から作り上げる味噌や豆腐、きな粉を練り込んだ皮で大豆ミートを包む餃子などを地域住民と共に手作りすることで、豆料理は徐々に好評に転じ、地元農産物の啓もう普及や消費拡大に貢献している。



写真3 地元産食材の使用

(2) 地元農産物を使用した製品化と女性の経営参画

本別町には「美蘭牛」^{びらんぎゅう}「ほんべつ和牛 BeansBeef」といった肉牛生産者毎のブランド牛がある。当該団体ではこれらに合う、地元農産物を使った独自の「焼肉のたれ」を将来の商品化を見据えて開発することとした。女性農業者のリーダーをはじめ女性メンバーが中心となって参画し、彼女たちの視点やアイデアを取り入れてる。地元産の玉ねぎやにんにくなどの食材を使い、本別の豆から作った味噌や醤油を使うことで、地域の特色を生かした味わい深いたれが完成した。家庭での調理経験を活かし、誰でも簡単に地元の美味しい焼肉を楽しめるたれである。

地元農産物の加工に大きな可能性を見出しており、地域ブランドとしての地位を確立しつつ、商品化のための経営戦略を検討しているところである。

(3) 地域と連携した「ちいき食堂」

子どもが安心して過ごせる居場所として「子ども食堂」が全国的に広がっている中、当該団体ではその対象を幅広い世代に広げ「ちいき食堂」を実施している。

JA や地域スーパー（食材）、飲食店（調理場）等の協力を得て、本別の豆を使った「大豆ミートハンバーグ」や地域の野菜などを使った弁当を、子どもには無料、一般には200円で提供。親子連れや高齢者など約50名が食事や会話を楽しむことにより、安心して過ごせる住民交流の場が提供されている。



写真4 ちいき食堂

ちいき食堂は、子どもたちや高齢者、その家族や地域の人々が交流する場であり、当該団体のようなボランティアや地域企業等が協力し合い、食事の提供や運営を行うことで、地域の絆を確かめている。定期的に顔を合わせることで、助け合いの精神が醸成され、地域コミュニティがより強固になっている。

また、安心して過ごせる場所を提供するだけでなく、孤立しがちな家庭や個人にもコミュニティの一員として参加する機会を創造することに寄与している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 公共の場の清掃と人材の発掘

町民の憩いの場となっている本別公園には、エゾシカなどの野生生物が多く出没するため、排せつ物による環境悪化が目立つ場合がある。当該団体は地元紙などの呼びかけにより集まったボランティアによる清掃を行う。

また、同公園に多く栽培されている町花「エゾムラサキツツジ」の芽の剪定を、観光協会の管理員の指導をもとに行う。

公共施設が清潔に保たれることで、住民や訪問者にとって快適な環境が提供されるだけでなく、町民に広く参加を呼びかけることで行動を自粛していたり、躊躇していたりする方の参加を促すことを目的としている。参加者同士が協力して作業を行うため自然な交流の場となり、互いに協力し合う精神が育まれ、コミュニティの絆が強化されている。

参加する子どもたちにとっても、清掃等の活動は地域の絆を感じ、次世代に継承するための重要な機会となっている。



写真5 「エゾムラサキツツジ」の芽の剪定

(2) 地域資源の再発見と人の呼び込み

町内を流れる清流 美里別川や利別川では、ヤマメやイワナなどの溪流釣りが楽しめることに着目し、町内はもとより町外からも参加を募りフライフィッシングの講習会を開いている。参加者は、フライにタイイング（疑似餌の自作）、ロッドの振り方などを学び、町の自然を大いに満喫した。

また、このような場をいつまでの大切に使えるよう、河川の清掃活動も行うことで、自然保全の大切さを伝えている。

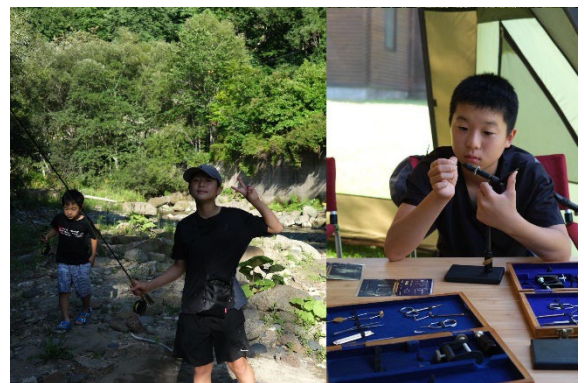


写真6 フライフィッシングの指導

(3) 移住定住の促進

町への移住者は年間10名ほどである。当該団体は、移住者が地域に馴染むための地域住民との交流イベント提供することで、新しいコミュニティにスムーズに溶け込めるように支援した。

このイベントは、町内へ移住した２組の夫婦と、英語教員として来日した１組の外国人夫婦に、移住等の経過や感想などを問うものであった。地元住民との絆の形成に寄与しており、「移住者が心地よく居られるのは、らぼのおかげ」（町職員談）と言われるまでになっている。

移住者と地元住民の距離を近づけることで、地域の結束力が高まり地域社会全体の活力向上を目指している。



写真 7 移住者との触れ合い